



日本語における語認識と平板型アクセント

儀利古, 幹雄

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2009-09-25

(Date of Publication)

2010-09-15

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4813

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004813>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 儀利古 幹雄
博士の専攻分野の名称 博士（文学）
学 位 記 番 号 博い第 4813 号
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の日付 平成 21 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

日本語における語認識と平板型アクセント

審 査 委 員

主 査 教 授 窪 蘭 晴 夫
教 授 西 光 義 弘
神戸女学院大学文学部准教授 田中 真一

概要

日本語における平板型アクセントは、他言語から見た場合は非常に稀な音調であり、日本語の韻律特徴として最も際立ったものである。それゆえ、様々な先行研究において、その生起要因が明らかにされてきた。たとえば、Kubozono (1996) の外来語における平板型アクセント生起要因の一般化は、音韻的平板型生起要因の代表的なものとして挙げられる。また、「病」や「覚」のような複合名詞の後部要素における平板化形態素 (秋永, 1985; McCawley, 1968) は、形態的平板型生起要因として分類される。その他にも意味的平板型生起要因に関する先行研究も存在するが (田守, 1991; Kageyama, 2007)、以上のような平板型生起要因を、本研究では一括して「語構造依存型平板型生起要因」として分類する。語構造依存型平板型生起要因の特徴としては、語の韻律構造や形態構造に依存して平板型が生起することや、話者間でアクセントの揺れが観察されにくく予測力が高いことなどが挙げられる。

一方で、秋永 (1985) は、語に対する馴染み度 (familiarity) も平板型アクセント生起には関係していると述べている。たとえば、外来語は本来日本語における語種の中でも最も平板型を取りづらいものであるが、古くに日本語に借用され、日本語における定着度が高い外来語は平板型アクセントで発音される傾向にある (e.g. ガラス, カルタ)。また、井上 (1995) は、ある特定の専門領域に属する話者は、その領域の専門用語を平板型で発音する傾向が強いと報告している。これらはいずれも、話者の語に対する馴染み度が、生起するアクセント型に影響を及ぼすことを示唆している。そして、馴染み度という概念は、話者の語に対する認識の1つの在り方に他ならない。このような平板型生起要因を本研究では「語認識依存型平板型生起要因」として分類する。語認識依存型平板型生起要因の特徴としては、語の構造に依存することなく、話者の語の構造や意味に対する認識や、話者内での語の定着度により依存して平板型アクセントが生起すること、また、話者間で語に対する認識にずれが生じるため、生起するアクセント型にも個人差が生じやすく予測力が低いことなどが挙げられる。この点が語構造依存型平板型生起要因と最も異なる点である。

上記のように日本語における平板型アクセントの生起要因を2タイプに大別したうえで、本研究では、先行研究で指摘されることの少なかった新しいタイプの平板型生起要因の存在を指摘することを主要な目的とする。具体的には、語構造依存型と語認識依存型の双方の性格を併せ持つ、混合的な平板型生起要因を明らかにすることが本研究の目的である。そのために本研究では、先行研究で言及されることの少なかった、語末が/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/である外来語 (e.g. インスリン, マケドニア, ランニング) における平板型生起要因に焦点を当てる。これらの語は、Kubozono (1996) の一般化に従わず、語の音韻的長さが5モーラ、場合によっては6モーラでも平板型アクセントを取る傾向にあるため、日本語における平板型アクセント研究では例外的な現象として扱われてきた。しかし本研究では、このような語を詳細に考察・分析することによって、語末が/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/である外来語における平板型アクセントも無秩序に生起しているわけではないことや、先述の新しいタイプの平板型アクセント生起要因の存在を明示的に示すことができるということを主張する。

以上のような問題意識を背景として、本研究では主に東京方言話者に対する発話実験や語に対する馴染み度の調査、または語の意味を限定した発話実験や語の分節実験を実施した。その結果としてまず明らかになったのは、語末が/-Cin/である外来語は語長が5モーラの場合に、語末が/-Cia/である外来語は4モーラもしくは5モーラである場合に、語末が/-Cingu/である外来語は5モーラもしくは6モーラである場合に、平板型アクセントの生起頻度が極めて高くなるということである。また、どのような語のタイプであっても、話者の語に対する馴染み度は基本的に平板型生起頻度には影響しないこと

も明らかになった。

しかし一方で、語の意味を限定した発話実験では、語末が/-Cin/である外来語は語が「医学・化学用語」を意味しないと平板型アクセントが生起しないことも明らかになっている。これは語末が/-Cia/, /-Cingu/である外来語においても類似した傾向が観察されており、語末が/-Cia/である外来語は「地域・地名」を意味しないことには平板型アクセントが生起しないし、語末が/-Cingu/である外来語は「Xすること」という動詞的な意味を語が有さなければ平板型生起頻度が極端に低くなる。また、語の分節実験では、話者が語を/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/の直前位置で分節した場合 (/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/の直前位置に疑似形態素境界を認識した場合) にも、平板型生起頻度は著しく高くなることも明らかになった。このことを換言すれば、話者が語の構造を[X+Cin], [X+Cia], [X+Cingu]として認識しなければ (たとえば[X+xCin], [X+xCia], [X+xCingu]と認識すれば)、韻律的には完全に同一の語であっても平板型アクセントは生起しないのである。

以上のような事実は、話者の語の構造や意味に対する認識が、決定的に平板型生起頻度に影響を与えていることを示唆するものである。また同時に、このような事実は、話者の特定の認識下においては語末が/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/である外来語は疑似複合語 (pseudo-compound) として機能するということや、語末の/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/が疑似平板化形態素として機能しているということを明示的に示すものである。この意味で本研究は、他言語 (Andrew, 2005; Karvonen, 2005, etc.) と同様に日本語においても、疑似複合構造という概念はアクセントのような韻律現象を分析する際に有用であることを指摘するものである。なお、語末が/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/である外来語における平板型アクセント生起に対して、話者の認識が語のモーラ長以上に強い影響力を有することは、対数線形分析 (Log-linear Analysis) という手法によって、統計的にも裏付けられていることにも注意されたい。

ただ、一度話者が語の構造を[X+Cin], [X+Cia], [X+Cingu]というように認識し、語を適当な意味を有するものとして認識してしまえば、生起するアクセント型が平板型アクセントである確率は非常に高い。上記のような語に対する認識を持つ話者が、その語を起伏型アクセントで発音することは極めて稀なのである。この現象は、複合名詞の後部要素が「病」であれば、生起するアクセント型は一律して平板型アクセントであるという現象に類似している (e.g. 心臓病, 精神病)。複合名詞の後部要素が平板化形態素であれば、生起するアクセント型は平板型アクセントであるという平板型生起要因は形態的なものであり、語構造依存型として分類される。このような意味で、語末が/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/である外来語における平板型アクセントの生起要因は、語認識依存型としての特徴を有すると同時に、語構造依存型としての性格をも併せ持っているのである。本研究では、そのような先行研究で指摘されることが極めて少なかった新しいタイプの混合的な平板型生起要因の存在を統計的・実証的に示したという意味で、日本語の平板型アクセント研究に対して貢献したと言える。

最後に本研究では、本研究で明らかになった語構造依存型と語認識依存型の双方の特徴を併せ持つ平板型生起要因を、包括的・統一的なモデルで表している。そこで重要なのは、話者の語の構造や意味に対する認識が行われる過程と、認識過程の出力がレキシコンに入力され、レキシカルな情報と照合され平板型アクセントが生成される過程とは異なる段階として存在するという点である。このような2つの段階が両方関与するからこそ、語末が/-Cin/, /-Cia/, /-Cingu/である外来語における平板型アクセントの生起要因は、語構造依存型と語認識依存型の特徴を併せ持つのである。また本研究では、語認識過程とレキシコンにおける照合という2つのプロセスが関与するアクセント生起要因は、現在の音韻論において主流理論である Optimality Theory (Prince and Smolensky, 2004) では捉えきれないということも指摘している。

論文審査の結果の要旨

| | | |
|--------------|--|--|
| 氏 名 | 儀 利 古 幹 雄 | |
| 論 文 題 目 | 日本語における語認識と平板型アクセント | |
| 要 旨 | <p>本論文は日本語のプロソディー構造の中でもっとも特徴的とされる平板型アクセントについて、その生起要因を主に東京方言のアクセント調査をもとに分析したものである。</p> <p>これまで平板型アクセントが生じるとされてきた言語学的要因を本論文は大きく二つのタイプに分類する。その一つは、「語構造依存型」と呼ぶ要因であり、この中には語の長さ（モーラ数）や音節構造などの音韻構造が関与するもの、「病」や「党」のような特定の形態素が関与するもの、特定の意味構造が関与するものなどが含まれる。これに対し、語に対する話者の馴染み度も平板型アクセントに関与し、たとえば同じ外来語でも日本語に定着したものは比較的最近借用された外来語に比べ平板型アクセントになりやすいと報告されている。本論文はこの二つ目の要因を「語認識依存型」と呼び、その特徴として、語の構造に依存することなく、話者の語の構造や意味に対する認識や話者内での語の定着度にも依存して平板型アクセントが生起すること、また、話者間で語に対する認識にずれが生じるため、生起するアクセント型にも個人差が生じやすく予測力が低いことなどを挙げている。</p> <p>本論文は、日本語における平板型アクセントの生起要因を上記の二タイプに大別したうえで、先行研究で論じられることの少なかった新しいタイプの平板型生起要因として、語構造依存型と語認識依存型の双方の性格を併せ持つ要因を分析している。具体的には、/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/という音連続で終わる外来語（たとえばインスリン、マケドニア、ランニング）である（Cは任意の子音を表す）。これらの語は、Kubozono (1996) の一般化に従わず、語の音韻的長さが5モーラ、場合によっては6モーラでも平板型アクセントを取る傾向にあるため、日本語における平板型アクセント研究では例外的な現象として扱われてきた。しかし本論文では、このような語を詳細に考察・分析することによって、語末が/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/である外来語における平板型アクセントが無秩序に生起しているわけではないことを示し、その要因が語構造依存型と語認識依存型の双方の性格を併せ持つ混合的なタイプであると論じている。</p> <p>本論文は序章（第1章）と結論（第7章）を含む、合計7つの章から構成されている。第1章で研究の目的や基本概念・用語の定義、論文の構成を述べた上で、第2章では東京方言の平板型アクセントに関する先行研究を、音韻的要因、語種、形態的要因、意味的要因に分けて概観している。形態、意味的には非複合語でありながら、音韻的には複合語として振る舞う「擬似複合構造」を紹介しているのもこの章である。</p> <p>本論文の主要部分は第3章から第6章までの4つの章である。このうち第3章～5章では/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/という構造を持つ外来語について、主に東京方言話者に対する発話実験や語に対する馴染み度の調査と、語の意味を限定した発話実験、語の分節実験の結果を報告している。これらの調査・実験の結果として、語末が/i-Cin/である外来語は語長が5モーラの場合に、語末が/i-Cia/である外来語は4モーラもしくは5モーラである場合に、語末が/i-Cingu/である外来語は5モーラもしくは6モーラである場合に、平板型アクセントの生起頻度が極めて高くなることを報告する。また、どのような語のタイプであっても、話者の語に対する馴染み度は基本的に平板型生起頻度には影響しないことも明らかにしている。</p> | |
| 主査記載 氏名・印 | 窪 蘭 晴 夫 | |

しかしその一方で、語の意味を限定した発話実験では、語末が/i-Cin/である外来語は語が「医学・化学用語」を意味しないと平板型アクセントが生起しないことも明らかにした。語末が/i-Cia/, /i-Cingu/である外来語においても類似した傾向を示し、語末が/i-Cia/である外来語は「地域・地名」を意味しないことには平板型アクセントとはならず、語末が/i-Cingu/である外来語は「...すること」という動詞的な意味を持たなければ平板型生起頻度が極端に低くなると報告している。また、語の分節実験では、話者が語を/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/の直前位置で分節した場合（/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/の直前に疑似形態素境界を認識した場合）にのみ、平板型生起頻度は著しく高くなることも明らかになった。換言すれば、話者が語の構造を[X+Cin], [X+Cia], [X+Cingu]として認識しない場合（たとえば[X+xCin], [X+xCia], [X+xCingu]と認識する場合）には、韻律的には完全に同一の語であっても平板型アクセントは生起しないというのである。

以上のような事実をもとに、話者の語の構造や意味に対する認識が、平板型生起頻度に決定的な影響を与えていると結論づけている。また同時に、話者の特定の認識下においては語末が/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/である外来語は疑似複合語（pseudo-compound）として機能するという、換言すれば、語末の/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/が疑似平板化形態素として機能していると論じている。この意味で本論文は、他言語（Andrew, 2005; Karvonen, 2005, etc.）と同様に日本語においても、疑似複合構造という概念がアクセントのような韻律現象を分析する際に有用であることを指摘する。なお、問題の平板型アクセント生起に対して話者の認識が語のモーラ長以上に強い影響力を有するということは、対数線形分析（Log-linear Analysis）という手法によって統計的にも裏付けられていることを示している。

以上が第3章～5章の論旨であるが、続く第6章では上記の分析で明らかになった語構造依存型と語認識依存型の双方の特徴を併せ持つ平板型生起要因を、包括的・統一的なモデルで表すことを試みている。そこでは、話者の語の構造や意味に対する認識が行われる過程と、認識過程の出力がレキシコンに入力され、レキシカルな情報と照合され平板型アクセントが生成される過程とは異なる段階として存在すると主張する。このような2つの段階が両方関与するからこそ、語末が/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/である外来語における平板型アクセントの生起要因は、語構造依存型と語認識依存型の特徴を併せ持つというのである。また本論文では、語認識過程とレキシコンにおける照合という2つのプロセスが関与するアクセント生起要因は、現在の音韻論において主流理論であるOptimality Theory (Prince and Smolensky, 2004) では捉えきれないということも指摘する。

本論文は、日本語諸方言の中でも東京方言、近畿方言に限られている点、アクセントの中でも平板型アクセントに限定されている点、その中でも特定タイプの外来語の分析だけを論じていることなど、研究の対象が比較的狭いという弱点を持っている。しかしながら、堅実な言語調査に基づき、これまで本格的に論じられることのなかった、/i-Cin/, /i-Cia/, /i-Cingu/という構造を持つ外来語の平板型アクセント生起要因を明らかにし、「語認識依存型」と「語構造依存型」の両方の性格を併せ持つ新しいタイプの平板型生起要因の存在を統計的・実証的に示したという意味で、日本語のアクセント研究に大きく貢献していると言える。

以上の審査をもとに、本審査委員会は全会一致で論文提出者 儀利古幹雄が博士（文学）の学位を授与されるに足る資質を有すると判断した。

審査委員

| 区 分 | 職 名 | 氏 名 |
|-----|-------------|---------|
| 主 査 | 教 授 | 窪 蘭 晴 夫 |
| 副 査 | 教 授 | 西 光 義 弘 |
| 副 査 | 神戸女学院大学・准教授 | 田 中 真 一 |